『金瓶梅詞話』創作考

――特に七十回に見られる組み曲「享富貴受皇恩」について――

荒木　猛

〔抄　録〕

『金瓶梅詞話』七十回に、都の顕官朱勔の出世を祝う祝宴の様子を描く一段がある。ところが、この時この宴席を盛り上げるべくよばれた役者達は、こともあろうに、朱勔を非難嘲笑する内容の唄を堂々と唱う。更にいぶかしいのは、非難嘲笑されている当の朱勔はなんら立腹することなく、一切これを聴いてないかのように描かれているのである。

ＰＤハナン氏以来、これは、役者達の唱う文言を借りて言うこの小説の作者による介在とされるが、一体このような描写の発想はいかにして生れたかという問題は残っている。

本稿では今回、この小説の作者の戯曲愛好癖について種々考察し、これは戯曲のしぐさのうちの背科とよばれるものから発想されたものではなかったかと推定した。

キーワード　㈠、『金瓶梅詞話』七十回。㈡、組み曲。㈢、戯曲。㈣、背唱。㈤、創作手法。

はじめに

『金瓶梅詞話』（以下これを『詞話』と略称する）七十回は、西門慶が、ある日自らが勤める提刑所で、近く自分がそれまでの副千戸から正千戸に昇進することを知り、上京し天子への謝恩の上書をする一段である。

上京した西門慶は、まず自分の上司である朱勔を拝謁すべくその館にむかうが、そこでたまたま朱勔の昇進を祝う祝賀の宴を目にすることとなる。

ところが不思議なことに、この宴席を盛り上げるべくその場によばれた役者達が、朱勔を祝うどころか、却って彼を非難嘲笑するとんでもない内容の曲を唄うのである。更にいぶかしいのは、唄でこき下ろ

された当の朱勔のみか、彼の昇進を祝いに集った人々も、この役者達をなんらとがめることはしないのである。一体、これはどういうことなのか。

実は、このことについては、既にPDハナン氏の指摘[1]があり、筆者もかつて少し触れたことがあるので[2]、論述に若干の重複があるかもしれないが、今回は、特に『詞話』における戯曲の影響という観点から考察し、ひいては、この小説の創作上の特色の一端を明らかにしてみたいと考えるものである。

一、

まず、役者達が演奏した問題の組み曲（以下これを套曲と称する）がいかなる状況の下でなされたかを知る為に、この七十回のストーリィを少し精しくたどって見てみよう。

この小説のいわば主人公である西門慶が都の権力者の蔡京に、毎年誕生日の贈り物を届けるなどして歓心を買っていたことが功を奏し、提刑所副千戸という地位を得たのが三十回のことである。それより彼は、役人と商人の二足の草鞋を履いて、自らの欲望の赴くまま行動する。

さて、西門慶の就いた提刑所副千戸というポストは、勿論虚構のそれである。しかし、筆者はかつて、このポストを天子の身辺警護などを担当する錦衣衛副千戸が想定されていたのではないかと論じたことがあり[3]、この考えは今も変っていない。

話を小説に戻そう。西門慶はある日、兵部が発行する官報から、自分の上司の夏延齢が山東提刑所正千戸から都の鹵簿（ろぼ）（天子行幸時の儀仗）の職に、そして自らは、それまでの副千戸から正千戸に昇進することになったことを知る。それより日ならずして、本衛の経歴司[4]より、このたび昇進を果した各省の提刑官は天子に謝恩の上書をする為急ぎ上京すべしというお達しを手にする。かくして、西門慶と夏延齢の二人は、早々に上京することとなった。

上京してからの西門慶の足取りをかいつまんで述べると、以下のようになる。

(1)、まず太師蔡京の屋敷に挨拶に出向いている。しかし蔡京は不在だった。代りに現われた執事の翟謙から都での今後の段取りをきく。

(2)、翟謙の指示に従って、宮城の午門に赴き、謝恩の上書を差し出す。

(3)、宮城午門からの帰り道で、何沂という一人の太監に呼び止められる。用件は、此の度この太監の甥の何永寿というのが、慶の部下の山東提刑所の副千戸になったので、何分宜しく頼むということであった。

(4)、しばし何沂と会食しつつ話を交わしたあと、兵部と本衛の両役所に挨拶に立ち寄り、それぞれに自らの名刺を出す。その後、下宿先に戻ってみると、すでにそこに昼間会った太監何沂の甥で、これから自分の部下となる何永寿が待っていた。早速二人は好みを結ぶ。

(5)、翌日、慶は何永寿とともに二人の上司である朱勔に名刺と贈り物の目録を出しその引見に与るべく朱勔の館にむかう。折しもこの時、朱勔は新たに太子太保になったというので、吏部や礼部の諸大臣及び皇族の方々や、高位高官の人々が沢山集っていた。

さて、歴史上の朱勔は、防禦使としてかの悪名高い花石綱の責任者であり、世人の恨みを大いに買った人物で、その位は従五品にすぎなかった。この小説中の朱勔はと言えば、この七十回の初めの方で、工部に対して反答する聖旨の中では、「金吾衛提督官校太尉朱勔は、神運（花石綱）を督理して成功を収めたので、太傅兼太子太傅に任ずる」と見えるが、同じ七十回の終りの方では、「朱勔が新たに光禄大夫太保に任ぜられた云々」とあり、その記述が一定しない。しかし、太傅にしろ太保にしろ、古来太師とともに三公とよばれ、正一品の人臣中の最高位の官職である。従って、小説中の朱勔は、歴史上のそれと異なり、大層な地位と権勢とを持った人物として描かれているとみなければなるまい。それは一体どんな立場の人を念頭において描かれているものか。このことについては、かつて論じたことがあるので、ここでは精しくは述べないが、結論を言えば、小説中の朱勔は、明代の錦衣衛指揮使（正三品）といったものを念頭に置いて描かれていると考えられる。

さて再び、西門慶と何永寿のことに話を戻すと、二人が朱勔邸前に着いた時、朱勔は不在で、その日天子が南壇の祭天を行うにつきその護衛として部下を連れ出かけていたのであった。やがて黒装束の金吾衛の兵士達に守られ轎に乗った朱勔が館に戻ってくると、かねてより待ちかまえていた大小の役人達が、朱勔の今般の昇進を祝っての祝宴を開始する。かくして、この祝宴の為に呼び集められた教坊の楽師達がさまざまな音楽を演奏してこの宴席を盛り上げる。そして、その音楽の一つとしてここに書かれるのが、唄い出しが「享富貴受皇恩」で始まる套曲なのである。

今、この套曲の内容がいかにこの場にふさわしくなく異常とすら言えるものかを見る前に、この状況下でこの套曲が挿入された意味と効果について、すでにＰＤハナン氏の説があるので、まずそれを見ておこう。

二、

ＰＤハナン氏の説は、その論文“Sources of the Chin Ping Mei”[5]に見える。この論文は、『金瓶梅』の作者がこの小説を創作するにあたって使ったであろう戯曲・小説あるいは俗曲其他について論じた金瓶梅研究にとって極めて有用なものだが、このうちの、素材となったであろう戯曲について論じた部分にこの説が展開されている。

ハナン氏は、まず『金瓶梅』と関係の深い戯曲として、「玉環記」と「林冲宝剣記」（以下「宝剣記」と略す）を挙げた上で、中でも「宝剣記」が『金瓶梅』の素材として最も重要だとし、次に、「宝剣記」のどの部分から小説のどの部分に引用されているかを指摘している。それに依れば、

1)、六十七回に見える「寒夜無茶云々」と「四野彤霞云々」の両種の俗曲は、「宝剣記」三十三出からとられている。

2)、七十回で朱勔の富貴を語る「官居一品、位列三台云々」という長い独白は、「宝剣記」三出に見える。またすぐその後に出る「享富貴受皇恩」という套曲は、同五十出に見える。

3)、六十一回で李瓶児の病床に趙といういいかげんな医者がよばれ、見当違いの見立てを行うのは、「宝剣記」二十八出の再現である。

4)、七十九回で呉月娘が不吉な夢を見て、占い師をよんで占ってもらう一段は、「宝剣記」十出で林冲が不祥の怪夢を見て、占い先生に占ってもらうことの再現である。

このうち2)、の套曲「享富貴受皇恩」に関するハナン氏の指摘は、更に凡そ次の二点にまとめられる。

1、通常七十回のような場面では、朱勔のような大官に対するべた賞めの賛辞が使われるが、『金瓶梅』が創作されたと思われる頃に流行していた散曲に、その類のものは少なくなく、それは当時通行していた戯曲選集に見えること。戯曲選集のうち、正徳十二年（一五一七）の序のある『盛世新声』巻一や、嘉靖四年（一五二五）の序のある『詞林摘艶』辛集、更に嘉靖四十五年（一五六六）の序のある『雍熙楽府』巻三には、七十回に見えるものと同じく「享富貴受皇恩」で始まる正宮端正好の曲（以下これを(A)の曲とする）が見えること。更に、この(A)の内容は、『詞林摘艶』では〝上太師〟（太師に敬意を表して）、また『雍熙楽府』では〝武臣享福〟（武臣のうけた幸せ）というタイトルがついているように、小説七十回に見えるもの（以下これを(B)の曲とする）と異なること。(B)の曲は、李開先の「宝剣記」に一致すること。

2、七十回のかの場面において、この小説の作者が「宝剣記」に見える套曲を採用したことの意味と効果について。まず作者がこの場面で「宝剣記」中に見える套曲を入れたのは、その場のパロディーを企図したもののようだとする。そしてこのことの効果としては、それが当時よく知られた賞賛の曲（(A)の曲）に似ている限りにおいて、風刺となるとする。次にこのことの意味としては、このような場面でかかる曲を配置することは、作者自身による故意の態度表明であり、それはまた同時に、作者の側からすれば、作者による自らの小説への別の形での介在ということになるとする。

以上の二点の指摘に関して、筆者もまったく同意見で、これに関しなんの異論もない。ただ筆者が疑問と思うのは、七十回のこの場面で「宝剣記」に見えるかの套曲を挿入するという発想がどこから出て来たかという点である。次に、このことについて考えて見たい。

三、

この問題に及ぶ前に、戯曲選集に載せられている当時の流行歌（(A)の曲）の内容と、「宝剣記」や『金瓶梅』に見える套曲（(B)の曲）の内容の相違について見ておかねばなるまい。

まず、(A)の方を、『盛世新声』にもとずき日本語に訳すと、次のようなものになる。

原　文　　訳

正宮端正好

享富貴受皇恩。　一　富貴を享けた上に皇恩を受け、綱紀（国家を治め

陳綱紀明天道。
貫胸襟虎略龍韜。
威儀楚楚全忠孝。
文共武皆奇妙。

る大法細則）を陳べ、天道を明らかにする。
胸襟に貫くは、虎略龍韜。威儀は、楚々（明らかなこと）として忠孝を全うす。
文は武と共に、皆な奇妙（ことに優れていること）なり。

滾繡毬

擺旌旗霞彩飄。
列干戈日月高。
驟蹀躞[6]馬卿着金絡。撼玲瓏玉掛絨絛。
擁高衙大纛雄。
臥重裀列鼎餚。
靄画堂瑞烟籠罩。
撲湘簾花霧飄颻。
金爐火暖龍涎噴。
銀燭光輝絳蠟燒。
歳月逍遥。

ならぶ旗は、朝やけ夕やけに飄えり、列ねたる干戈は、日月と光を争う。
とことこ歩く馬に鞭をくれ、金の手綱を銜ませ、玲瓏の玉をゆるがせ、絨絛を掛け、
高牙（将軍の旗）大纛（天子の旗指）の雄たるを擁し、重裀（厚い布団）に臥し、鼎餚（すばらしい料理）を列ぬ。
もやは、画堂に瑞烟（めでたいかすみ）の如くたれこめ、
風は、湘妃竹の簾をうち、花霞にひるがえる。
金爐の火は暖く、龍涎香は噴き溢れ、
銀燭の光は輝き、絳蠟（赤いロウ）は燒え、
かくして歳月は緩やかに流れゆく。

倘秀才

朝鳳闕朱衣紫袍。
陞虎帳貂裘繡襖[7]。
瞻仰龍楼爵禄高。
気昂昂趨黄道。
雄糾糾侍清朝。
近鑾輿与玉藻。

鳳闕（宮城の門）にむかうは、朱衣紫袍（高位の官人）。
虎帳（将軍の陣）に陞るは、貂裘繡襖（貂の皮で作った裘と刺繡のある長上衣）を着た人。
龍楼を瞻仰すれば、爵禄高く。
身をかがめて、黄道（天子のゆく道）をすすみ、
雄々しく清朝に侍って、鑾輿（天子の乗りもの）と玉藻（帝王の冠冕）に近づく。

呆骨朶

丹書鉄券金花誥。
撫華夷四海名標。
旌旗影欵動龍蛇。
金鼓響驚飛燕雀。
出落着威武飛熊兆[9]。
調鼎鼐。理陰陽。
居廊廟[10]。
普天下賀太平寿域[11]開。
宰臣毎整乾坤安定了。

丹書鉄券に金花の誥[8]。
華美を撫して四海に名標れ。
旌旗の影は、龍蛇（隠遁する才人）の心を喜び動かし、
金鼓の響きは、燕雀（小人物のこと）を驚飛させる。
威武を表すに、賢者を得る兆。
宰相の位を調え、君臣の関係を理め、常に政庁に居る。
天下普く太平の御世のひらけたるを賀す。
宰臣は、毎に乾坤（天下のこと）を整え安定させる。

貨郎児

開大宴齊臻臻華

大宴を開けばきちんとそろい、華宴にて皆歓楽す

筵歓楽。
香馥馥珍羞美餚。
有交梨火棗。有
蟠桃。
炮麟脯。烹魚尾。
燒熊掌。煎羊羔。

る。
（宴に出されるものは）香ばしい珍羞美餚ばかり。
交梨に火棗、更に蟠桃あり。（すべて道家の仙果）。
麟脯をあぶり、魚尾をにて、
熊掌を燒き、羊羔をいる。

醉太平
有龍笛鳳簫。間
鼉皷檀槽。
擺列着清歌妙舞
出妖嬈。
唱黄鐘六么。万
民豊足皆歓楽。
八方寧静開懐抱。
四時康泰尽和調。

龍笛鳳簫に雑って、鼉鼓（ダコ）に檀槽[12]。
清歌妙舞をつらね、妖嬈（艶かしい女）が登場し、
黄鐘にて六么[13]を唱えば、万民豊足して皆歓楽す。
八方は静かに治り、人々は心を開き、
四時おだやかに安ぎを尽す。

貨郎児
文修武備。日転
遷階。
穏拍拍的輔佐辺
庭。
把這風塵静掃。

文は修まり武も備はり、日々階位を転遷し、
楽々と四庭（外夷の朝廷）を輔佐し、
風塵（兵乱）を静掃（一掃してとり静める）せん。

尾　声
普天率土帰王道。
万国尊依賀聖朝。
君徳成勝禹舜堯。
臣宰賢良過管楽。
則将那天下奸邪
尽平勦。

普天率土すべて王道に帰す。
万国は尊び頼り聖朝を賀す。
君徳は成り、その徳は禹・舜・堯に勝り。
臣宰の賢良は、管楽[14]以上。
かくして、天下の奸邪ばらをはことごとく平勦（ソウ）
（せめ滅ぼし平らげる）せん。

これに対し、(B)の方は、『詞話』では次のような内容になっている。

原　文	訳
享富貴、受皇恩。	富貴を享け皇恩を受く。
起寒賤、居高位。	寒賤より身を起こし、高位に居り、
秉権衡威振京畿。	権力を秉（と）り、威武は京畿（都とその周辺）に振（ふる）う。
怙恩恃寵把君王	恩寵に恃みひたすら君王に媚びるばかりで、
媚、	
全不想存仁義。	全く仁義の道を御存知ない。
滚綉球	
起官夫造水池、	官夫を使って水池を造り、
与児孫買田基。	児孫の為に土地を買い、
苦求謀多只為一	ひたすら考えるのは、一身上のことだけ、
身之計、	
縦奸貪那裏管越	色と欲を貪（むさぼ）るも、たとえ越が痩せ呉が肥（こえ）よと知る
瘦呉肥。	ものか。

趨附的身即栄、
觸忤的命必危。
妒[16]賢才、喜親小
輩。
只想着復私仇公
道全虧。
你将九重天子深
瞞昧、致四海生
民総乱離、更不
道天網恢恢。

上にへつらえばすぐ出世するが、
さからえば命取り。
賢人をねたんで、小人ばらを近づけ、
ただ考えるのは私仇を晴らすことのみ、公明正大な所はまったくなし。
九重の天子をたぶらかし、四海の人民を苦しめているけれど、
天網恢々を知らないか。

倘秀才

巧言詞取君王一
時笑喜、
那裏肯效忠良使
万国雍熙。
你只待顚倒豪傑
把世迷。
隔靴空揉癢[17]、久
症卻行医。
滅絶了天理。

言葉巧みに君王一時のご機嫌をとっているが、
なんで忠良の心で万(よろず)の国々と仲良くしようと考えようか。
ただ政敵を倒して世を迷わせる。
これじゃまるで靴を隔てて掻(か)き、長患いなのに医者を退けるようなもの。
天地の道理も水の泡。

滾綉球

你有秦趙高[18]指鹿
心、屠岸賈縱犬
機。
待学漢王莽不臣
之意、欺君的董
卓燃臍。
但行動弦管隨、
出門時兵杖圍、
入朝中百官悚畏、
仗一人假虎張威。
望塵有客趨奸党、
借剣無人斬佞賊[19]。
一任的忒狂為。

心はさながら、趙高の鹿をさして馬といい、屠岸賈の犬をけしかけ人を殺したが如く、
漢の王莽を学んで二心を懐き、君を欺くそのあとは、董卓よろしく臍に火をつけられ葬られるだろう。
ただなにをするにも鳴り物いり、
門を出る時は儀杖兵に囲まれ、参内すれば百官に恐れられる。
ただ一人の君王の威に頼るは、虎の威を借る狐のごと、
風を望んで奸党に走る者はあまたおれど、
誰も剣をふりあげ佞賊を成敗する者なし。
結果、いよいよ悪党をのさばらす。

尾声

金甌底下無名姓、
青史編中有是非。
你那知燮理陰陽
調元気[20]。
你止[21]知盗売江山
結外夷。
枉辱了玉帯金魚
挂蟒衣、
受禄無功愧寝食。
権方在手人皆懼。

国に人材居なくとも、歴史に善悪残るもの。
政(まつりごと)なぞなんで知ろ、
ただ敵と結んで、国土を売るのみ。
これでは折角の玉帯や金の魚袋に蟒衣が泣くだろよ。
功もなく禄をはむばかりで、生き恥さらす、
権力を握っているから、人は皆懼れているが

禍到臨頭悔後遅。　禍い迫ったら悔んでも、もう遅い。
南山竹罄難書罪。　その罪悪累々、南山の竹をとり尽しても書ききれず、
東海波乾臭未遺。　東海の波が乾かぬうちは、その臭みは消えぬだろう。
万古流伝、教人　いつまでも後世に伝わって、人から罵られるのが
唾罵你。　落ちだろよ。

(A)の曲は、一読してもわかる通り、これは高位高官や勲功赫々たる功臣に対する祝いの席で演奏されるのにもってこいの内容の曲である。

ところで、この曲の作者は、「詞林摘艶」によれば丘汝成となっているが、残念なことに、この人物については今の所何の手懸りもない。もし彼が真にこの曲の作者であるとすれば、散曲集として一番古い正徳十二年（一五一七）の序のある『盛世新声』にこの曲が載っているので、この散曲集が刊行された頃か、それ以前の人であろうと推測できるのみである。またこの曲は、『盛世新声』の開巻冒頭に載せられていることからして、恐らく正徳末から嘉靖時代にかけてよく知られた曲だったろうと思われる。

一方(B)の曲の方は、これまた一読してわかる通り、高位高官の人間を非難嘲笑する内容で、(A)の曲と同じく「享富貴受皇恩」で始まり曲調も同じだが、内容がまったく正反対のものになっている。

「宝剣記」では、この劇のおわりの方で、都から洪太尉が梁山泊に来て林冲に招安を求めた際、林冲がこの曲を唱ってこれまで自分や自分の家族に迫害を加えてきた高俅父子に対して激しく非難する。この(B)の曲は内容からして、この「宝剣記」では至って順当かつ宜しきを得たものと言える。

常識からすれば、『詞話』の作者は、七十回のかの場面で、当時よく知られていたであろう(A)の曲こそ採用すべきであって、断じて(B)の曲を採るべきではなかったとなる。

ハナン氏の説によれば、これは、作者が役者達の唱う套曲の歌詞を利用して、朱勔のような人間を許せないとする態度を表明したもので、作者の作中介在であるとする。だが、口語小説における作者介在の伝統的手法としては、看官聴説（みなさんお聞き下さい）で始まる文句で介在することが普通であって、このように曲辞を用いての作者による介在手法は、筆者は少なくとも四大奇書においては、この『金瓶梅』以外に見たことがない。

一体このような手法と発想は、どこから来たのであろうか。以下において、これについて考えてみたい。

四、

曲辞をせりふ代りに使うと言えば、すぐに元曲が想起されるであろう。ところで、『詞話』ほど戯曲と深い関係をもつ小説はないように思われる。これは恐らくこの小説の作者の戯曲趣味に由来すると思われるが、次にしばらく、この小説における戯曲的痕跡をたどってみたい。

『詞話』における戯曲的痕跡としては、以下のようなものが認められる。

1)、小説では、先行する戯曲から曲辞を引用していること。

このことについては、すでに拙論もあり[22]、精しくは、そちらを参照願いたいが、再び挙げると、以下の通りである。

李開先の「林冲宝剣記」からは、この七十回の「享富貴受皇恩」の他に、六十七回の「寒夜無茶」と「四野彤霞[23]」

王実甫の「西廂記」からは、三十一回の「想人生最苦是離別」、四十六回の「懨懨瘦損」、六十一回と六十八回の「半万賊兵」、五十八回の「夜去明来」、五十九回の「兜的上心来」、六十八回の「游芸中原」、七十四回の「第一来為圧驚」と「玉驄驕馬出皇都」

邵燦の「香囊記」からは、三十六回の「花辺柳辺」「十載青灯黄巻」「紅入仙桃」「難報母氏劬労」

「玉環記」からは、同じく三十六回の「恩徳浩無辺」「弱質始笄年」

高明の「琵琶記」からは、二十七回の「向晩来」と「清宵思爽然」等の曲辞が、それぞれ引用されている。

2)、七十回の「享富貴受皇恩」の他に、せりふを唱でいう個所のあること。

これには、二十回で西門慶が廓の遣り手婆と互いに満庭芳の唄で言い争う。三十回で蔡という産婆が唄で自己紹介をし、四十回では趙という仕立屋がやはり唄で自己紹介をする。五十回で妓女の金児が山坡羊の曲で廓の苦労を唄う。七十九回で西門慶が死を前にして妻月娘と駐馬聴の曲で語りあう。八十九回では西門慶の墓の前で、呉月娘と孟玉楼とが山坡羊の曲で亡き慶にむかって語りかける。九十三回では乞食にまでおちぶれた陳経済が、乞食仲間に対し、華やかだった過去と惨めな現在とを粉蝶児の曲で唄う。等が挙げられる。

3)、時に作中、ペテン師ないしそれに近い人が道化役として登場すること。

これは、すでにハナン氏の指摘する所ではあるが、この代表として、六十一回に登場する趙龍崗というインチキ医師が挙げられる。この趙医師がよばれて危篤の李瓶児を診察する。ところが彼は、すでに自らを趙搗鬼（ペテン師）と名乗った上で、やはり唄で自己紹介をするものの、「自分は医者をしてるが処方はできず、脈を診たらば口でごまかし、薬は作るが効き目はさっぱり[24]」などとうそぶく。尚、道化役としてのインチキ医師の登場は、恐らく金の院本以来のもので、たとえば、陶宗儀「輟耕録」巻二十五院本名目に見える双闘医は、劉唐卿の元曲「降桑椹蔡順奉母」雑劇の第二折に組み込まれて今に伝わり、劇中、宋了人と糊突蟲という二人のインチキ医師による掛け合い万歳のような一席が見える[25]。

インチキキャラクターとしては、この趙医師の他に、五十六回に見える西門慶の祐筆になりそびれた水秀才なども、この類に入るだろう。

以上見てきたように、『金瓶梅詞話』という小説は戯曲と大変縁が深い。このことからその真姓名こそ未だ不明だが、この小説の作者が相当の戯曲愛好家であったであろうことは想像するに難くない。

五、

さて、演劇の用語に傍白というものがある。これは、舞台上に複数の人物がいる状態で、ある特定の人物によって語られ、その人物は、それによって他の人物には知られたくない自らの秘密の計画や情報、更には本心などを語るのだが、舞台上のその他の人物には聞えない立前になっており、観客にのみ内容を提供する為に用いられる手法である。これによって語り手と観客とが認識を共有し、劇の進行や語り手以外の登場人物に対して距離をおいてながめることが可能となるので、ここに深いアイロニーが生れるとされる。

元曲においても、この傍白のしぐさを有する劇がある。『元曲選』などでは、これを「背云」あるいは「背科云」というト書きで示されている。[26]

たとえば、王実甫の「西廂記」の第一本第二折[27]では、科挙受験生の張君瑞がたまたま泊った蒲州の名刹普救寺で崔鶯々という女性に遇い、彼女のあまりの美しさに思わず言うせりふが、「好个女子也呵（いい女だなァ）」であり、また頑固に原則と理窟をこねる住職の法本に対しては、「這禿廝巧説（この坊主、うまいことを言いおる）」などと言うが、これらはすべて、ト書きで背云と書かれており、まわりの登場人物には一切聞えないという約束の上で発せられる言葉である。このように、これら背云で張君瑞の本心が語られる。

また元曲では、登場人物のうちのある一人が曲を唱い、その曲辞の中で自分の本心を吐露することもある。この場合、ト書きでは「背唱」として示されており、たとえば、関漢卿の「救風塵」雑劇第三折で、汴梁の芸者趙盼児が、この背唱のしぐさをする個所がある。

この段は、妹分の芸者の宋引得が、知事のドラ息子の周舎に惚れて嫁いだのはよいけれど、結婚後は周舎から始終いじめられっぱなしであることを風の噂で知った趙盼児が、この妹分を救うとして、周舎の前に現われ、実は私は昔からあなたの妻になりたかったと心にもないウソをつく。すると浮気性の周舎はまんまとこれにひっかかり、今にも趙盼児に心を動かそうとした時、姉御の魂胆を霧知らぬ宋引得は、夫が心変りしそうなことを察して血相を変えて駆けつけて来て、盼児のことを口汚く罵る。この時、趙盼児は次のように背唱する。

我假意児瞞、虚科児噴、着這廝有家難奔。妹子也、你試看咱風月救風塵。（私は、わざといつわりこやつを迷わせ、その家庭をメチャクチャにしてやるつもり。妹よ見ててごらん、私が色仕掛けであなたを苦海から救うのを。）

この曲は、周舎と宋引得の二人の前で堂々と唱われるが、この二人には聞えないことになっている。このあと、趙盼児は周舎に、宋引得にきっぱり離縁状を書いて別れてくれたら、私はあなたの女房になると言う。この時周舎はすっかり趙盼児に夢中だったから、二つ返事で宋引得への三下り半を書く。後段、この離縁状のお蔭でめでたく宋引得は周舎と手を切ることができたという展開になっている。

さて、これまでるると元曲の背白・背唱について述べてきたが、それと言うのも、筆者は、『詞話』七十回に見える問題のかの套曲の用いられ方は、この元曲の背唱の手法と発想が用いられたのではないか

と考えるからである。この小説の作者が相当の戯曲愛好家だったらしいことは、前節で述べた。このような内容の套曲を役者達に祝いの席で唱わせるという発想は、戯曲に通じた人であって始めて可能だったのではあるまいか。

また、今回この小説の読者について論及していないが、この小説が万暦初年から、『詞話』が刊行された万暦四十五年までの約四十年間に、董其昌・袁宏道・袁中道・沈徳符・馮夢龍・李日華といった万暦の一流の文人達の間で写本の形で伝わっている。こうした写本に接した当時の読者達も、かの七十回の套曲の本歌を知っていたに違いない。そして、小説の方の内容は、表むきは北宋末の朱勔を批判しているように見せて、実は明代で悪名高い天子の諜報機関たる錦衣衛に対する批判であることも、読めば即座に悟り、そのあまりの大胆さに驚いたに相違ない。

くり返すようだが、劇における登場人物と観客との情報の共有は、小説の場合、作者と読者との情報の共有ということになる。しかも、背唱という手法が用いられているからこそ、非難されている朱勔当人はおろか、彼の昇進を祝いにこの場に集った人々も、誰も役者達をとがめようとはしないのである。

おわりに

一口に「四大奇書」と言っても、『金瓶梅』は、他の三書と比べて特異である。よく言われるように、まず他の三書がいずれも宋代の講釈師以来の伝統をもち、話も時代が降るにつれて雪達磨式に大きくなってきたのに対し、『金瓶梅』はこれと異なり、明代のある文人が『水滸伝』中の武松・潘金蓮物語に想を得てこの小説を創作した点、まず大きな相違点として挙げられる。

更に、本稿で指摘したように、作中戯曲や流行歌をふんだんに駆使する点でも、他の三書にはほとんど見られないが、この小説ではそれが見られる点大いに異なる。まして流行歌の文句をもじって作中のある人物を皮肉るなどということは、他の小説では絶えて見られぬ所であって、『詞話』独特の創作手法の一つと言ってよいであろう。

ところで、明末の崇禎年間に出た『新刻繡像批評金瓶梅』（『崇禎本』とも称せられる）と、清の康熙乙亥の年（一六九五）に刊行された『第一奇書』では、いずれも本稿で問題にしたかの七十回の套曲を、ただ単に、五人の役者達が「享富貴受皇恩」を唱ったと書いているだけで、套曲の曲辞そのものはすべて削っている。つまり、現存する三種の『金瓶梅』の版本のうち、戯曲趣味に溢れる本は、『詞話本』のみとなる。

さて、『崇禎本』や『第一奇書本』において、「享富貴受皇恩」の套曲の全文が削られたことにより、当然戯曲風風刺のおもしろさは消え去ることとなった。ではなぜ、『崇禎本』において套曲「享富貴受皇恩」の全文が削られたのだろうか。勿論この流行歌のもじりに時の権力者に対する諷刺が含まれており、出版する側からすれば、権力者からあらぬ腹をさぐられたくないので削ったということもあるだろうが、一番考えられることは、刊行物として、小説の筋展開に直接影響のな

い所を極力削り、できるだけコンパクトにしたかった為ではなかったか。因みに、『詞話本』七十四回に見える「第一来為圧驚」で始まる套曲も、『崇禎本』『第一奇書本』では冒頭句のみ残し、やはり曲辞の全文は削られている。削れるものは極力削る代りに、『崇禎本』では二百葉の挿図を、「第一奇書本」では張竹坡の批評をつけ、より読み本化が進められ、刊行物として整備されていったと見るべきであろう。

本稿は、『詞話本』中の一套曲についてのみ考察するという、いささか重箱の隅をつつくような論文になった感があるが、一応、『金瓶梅詞話』七十回に見える「享富貴受皇恩」という套曲の用いられ方から、この作者の『金瓶梅』創作時における創作手法の一端を考えてみた。

〔注〕

(1) Patrik D. Hanan, "Sources of the Chin Ping Mei", Asia Major, New Series, Vol. X. Part I. London, 1963. 尚、筆者にこれの日本語訳がある。「金瓶梅の素材」（『長崎大学教養部紀要』人文科学篇第三十五巻一号、一九九四年）を参照されたい。

(2) 『金瓶梅』中の散曲について（長崎大学国語国文学学会『国語と教育』第二十一号、一九九六年所収）後、拙著『金瓶梅研究』（二〇〇九年思文閣出版）頁133～156に所収。

(3) 『金瓶梅』における諷刺―西門慶の官職より見た―（『函館大学論究』第十八輯、一九八五年。後、拙著『金瓶梅研究』（二〇〇九年思文閣出版）頁292～317に所収。

(4) 本文では本衛などとぼかしているが、これは錦衣衛をさすものと思われる。また経歴司とは、衛の各種文書を管理する部門のこと。『明史』巻七十六職官志に、錦衣衛……洪武十五年……設経歴司、掌文移出入。とある。

(5) 注(1)を参照されたい。

(6) 原文では、「驟璅瓊馬」となっているが、これでは意味が通じないので、ここでは「雍熙楽府」によった。

(7) 原文では、「貂裘鳳翹」となっているが、鳳翹は婦人の冠で、意味が通じないので、ここでは、「詞林摘艶」によった。

(8) 丹書鉄券は、功臣に賜り、子孫永く罪を免する証のこと。金花の話は、宋代婦人を封ずるに用いた金花紙に書いた辞令。

(9) 飛熊兆は、昔、周の文王が飛熊を夢に見て、間もなく姜尚を得たことから、賢人を得る兆のこと。（「武王伐紂平話」）

(10) 鼎鼐は、宰相の位。陰陽は、君臣のこと。廊廟とは、政事を執る所のこと。

(11) 寿域は、仁寿の域の意で、よく治った世の中のこと。

(12) 鼉鼓は、ワニの皮を張った太鼓。檀槽は、ビャクダンの木で造った琵琶のこと。

(13) 黄鐘は、十二の音律の一。六幺（リクヨウ）は、唐の琵琶曲の名前。

(14) 管は、斉の名臣管仲、楽は、燕の名将楽毅のこと。

(15) 原文では、「図求謀多」となっているが、ここは「宝剣記」によって改めた。

(16) 原文では、「量才」になっているが、意味が通じないので、ここは「宝剣記」によった。

(17) 原文では、「庠揉」になっているが、ここも「宝剣記」によって改めた。

(18) 原文では、「趙事」になっているが、やはり「宝剣記」によって改めた。

(19) 原文では、「腰賊」になっているが、やはり「宝剣記」によって改めた。

(20) 燮理陰陽調元気とは、国を治めること。尚、原文では、「調児気」になっていた。ここも「宝剣記」によって改めた。

(21) 原文では、「那知」になっていたが、やはりここも「宝剣記」によっ

て改めた。

(22)注(2)を参照されたい。

(23)「宝剣記」三十三出では、首句が「四海無家」となっていて、少し異なる。

(24)このせりふは、李開先「宝剣記」二十八出に見えるものとほぼ同じである。「宝剣記」の当該箇所では、林冲の妻に横恋慕する高明のもとに、やはり趙太医というインチキ医師がやって来て、これは婦人病だと言ったり、小児病はては畜生病かもしれぬなどと見当違いの見立てを言って恋わずらいの高明を苛立たせる。

(25)事は、胡忌「宋金雑劇考」(一九五七年)双闘医院本現存疑頁八十〜八十九、田中謙二「院本考」(「日本中国学会報」)第二十所収及び「田中謙二著作集」第一巻頁五十三〜九十四)等に見える。

(26)岡晴夫「元雑劇做工考」(「芸文研究」第十七号、一九六四年二月所収)を参照されたい。

(27)ここでは、即空観本「西廂記」によった。

付記

本稿は、平成二十五年度教育職員研修成果の一部である。

(あらき　たけし　中国学科)

二〇一三年十一月六日受理